

編集後記

『年報』36号をお届けする。本号では、久方ぶりにグループ研究（「20世紀とは何であったのか」代表・宮下誠一郎所員）による小特集を組むことができた。とりまとめにご努力いただいた方々に心から感謝したい。

本号の編集経緯について、以下簡単に記しておく。――例年通り、昨年5月に投稿希望を募った結果、全体で10件（論文9件、研究ノート1件）の執筆申し込みをいただいた。また本号では、ぜひ小特集をと考えていたので、いくつかのグループ研究に、小特集へのご協力をお願いした。その結果、上記「20世紀……」グループが積極的に応じてくださり、提出された企画を有り難くお受けすることにした。10月20日の締め切り日までに、お二人の方が執筆を辞退されたが、原稿は当初の予想をこえて順調に集まり、締め切りに間に合わなかった原稿もその後比較的短時日のうちに提出された。ただし小特集の原稿は、多人数の方々がかかわっていたため、とりまとめに時間がかかり、原稿提出は限界近くまで遅れた。また昨年度から、社研叢書の刊行がはじまり、すでに2冊の叢書が上梓されているので、この機会に、その書評を本号に掲載することにし、11月に入ってから3人の方に書評執筆を依頼した。書評執筆者には比較的短時間で原稿を仕上げていただかねばならず、ご迷惑をおかけしたことをお詫びする。校正作業は順調にすすみ、昨年度のように、再校段階での、常識を越える大幅な加筆はなかった。出来上がった『年報』は400ページをゆうに越える大部のものとなり、今回も適切なページ数に納めきれなかった。編集担当の不手際を反省せねばなるまい。

社研叢書の刊行がはじまり、『年報』で統一テーマのもとに特集を組むことがますます難しくなってきたが、編集担当としては、グループ研究の参加者にご協力いただき、毎回本号のように小特集が組めればと考えている。来年度の『年報』37号に向けて、今からご検討をお願いしたい。

最後になったが、今回もまた、編集作業をすすめる中で、社研職員の竹内佐和子さん、公人社の大出明知氏に大変お世話になった。心から御礼申し上げる。

（酒井 進）